

の叔父の所に泊まり、若松から叔父に送られて帰宅を  
しました。自宅では朝鮮から南方へ行っていたのは知  
りませんでした。家では、私の下は妹で、弟は適齡  
喜んでおりました。家では、私の下は妹で、弟は適齡  
の前ぐらいでしたから、兵隊には行かず全員無事でし  
た。

## 関東軍の精銳、南方戦線へ

栃木県 村上 博

私は農家の長男に生まれ、両親と弟三人、妹三人の  
兄弟で育ちました。高等青年学校卒業後、農業を手  
伝っていました。甲種合格で現役兵として昭和十八  
(一九四三)年一月、宇都宮東部第三十六部隊に入隊  
し、第三大隊歩兵砲隊に入隊しました。在隊一カ月  
後、渡満のため出発、釜山經由列車で北満州のチチハ  
ルの宇都宮第五十九連隊(第二一九部隊)に追及しま  
した。

初年兵教育は精強を誇る関東軍の伝統を守る峻烈極  
まるものでした。

九二式歩兵砲の分解搬送は四つの部分に分解して担  
ぎます。砲身だけでも五〇キロもある重さです。「分  
解搬送」の号令が下りると号令を聞いただけで身が凍  
る思いがしました。交代なしで八時間も歩いたことも  
ありました。辛い初年兵教育も無事終わり、一等兵に  
進級し観測手として特別訓練を受けることとなりました。  
た。

観測手は砲隊では農家の長男のような訳であり、観  
測の適否で真の砲の威力が問われる重要な重責を負う  
ので、一生懸命勉強しました。

また観測手は観測班として訓練が行われたので、内  
務班の空気が怪しいと観測訓練室に退避して古年兵の  
制裁から免れることもありました。「下士官候補とし  
て志願せよ」と上司より勧められましたが、長男であ  
るので志願を断りました。志願していたら今日の私は  
なかったと思います。

昭和十八年八月、師団の大興嶺突破演習が行われま

した。この演習は四十五日間を要し三〇〇里の大行軍に出発しました。行軍と野營の繰り返しを寧日です。

よくもこの足で耐えたと今でも自分ながら感服する行軍でした。

衛兵についても想い出が残っています。衛兵上番は日頃と異なって古兵も服装等について何かと気を遣ってくれ、送りだしてくれませす。弾薬庫動哨中、粉雪中を雪を踏んで零下、五、二〇度の寒さの中を巡回中、ふと前方の人影に一瞬緊張し誰何すると、我が班の内務班長が「どうだ、寒くないか」と心配して巡回してくださる。軍隊と殴る蹴るの厳酷な反面、こうした骨肉も分け合う温かい戦友愛の通り若者の集団でもありました。

冬季耐寒訓練に小隊は嫩江の水戸第二連隊駐屯地に派遣されました。第二大隊歩兵砲も第三大隊歩兵砲も参加しました。嫩江は北満で一番寒いところですよ。軍服の上に白衣を着て、弾薬馬に橇を引かせて、澱粉のような雪を踏んで演習を重ねました。太陽も霞んで月のごとく淡く輝き月の世界のような気がしました。こ

の耐寒訓練中蜃気楼という不思議な現象を目撃しました。

#### 動員下令

我々の師団に南方転出の動員下令が下りました。冬服を返納し未だ寒い気候の中で夏服に着替えました。編成換えにより第三步兵砲中隊となりました。南方戦線に向かう前に砲の性能試射を行いました。海中に浮かんだ岩を目標に試射が行われ、観測手として参加しました。

師団は兵員は旅順、資材は大連へと集結を重ね、連隊は「東山丸」に乗船し大連港を出港した後、途中朝鮮の鎮海港、瀬戸内海経由、横浜港、さらに房総半島館山洋上に二日ほど停泊し、母国を離れ、大洋に向かいました。

船団は五隻、護衛艦五隻、空中護衛機五、六機、絶えず上空を掩護し旋回を続けてくれて心強い限りでした。途中パラオ島の大空襲に遭遇し、船団は小笠原父島に一週間ほど退避を続けました。昼一枚に五、六人

という狭き、シラミの巢の中の生活、船中の暑気、その上救命胴衣を常時着用、着衣は一枚着用が海中一時間長生き説もあり、我々の体はシラミにとっては絶好の住みとなるわけです。

この航海中、軍旗衛兵に服務しました。万一の場合には軍旗を腹に巻いて海中に飛び込む覚悟で立哨します。連隊長に一番近いところで、緊張の連続でした。

航海の途中、護衛艦は敵潜水艦三隻も撃沈し護衛の任を全うしてくれたのであります。

かくして船団は無事バラオに到着することができました。全船団無事入港はほとんど前例がないという幸運でした。

無事渡洋を果たしても、兵器・資材・食糧の揚陸が完了しない限り、兵力配置の役に立たないので、必死の揚陸作業が続けられました。師団全員汗にまみれて懸命の揚陸作業が続けられました。

作業後、アラカベサン島に行軍しました。寒冷地満州で育った兵に、この南洋の暑さは耐えがたく、滝のような汗を流しながらの行軍でした。

この地で一週間ほど休養がありました。身辺の整理や水泳を楽しみ、戦争を忘れ過ぎひとときでした。その間、師団の配備も定まり、我々連隊は、このバラオ本島から離れること四〇キロのアンガウル島と定まり、隣の水戸連隊の守備地と決まったペリリュー島を左に望見しながら、暁部隊の舟艇に送られ西港に上陸しました。

四月二十八日、上陸後連隊の配備も定まり、自分の墓地と考え、一生懸命陣地構築に励んでいたところ、配備変更で付近に独立小隊として配備されることとなり、歩兵砲一個分隊が配属となり、陣地を構築することとなりました。陣地は天蓋が厚さ五〇センチで爆撃に耐え得る強度のコンクリート製で、私はここで中隊本部との連絡係をすることになり、陣地構築作業から外され、毎日のように中隊本部との往復に費やしました。途中パイアの林があり、往復の時採って、本部へも小隊へも土産として届け、喜ばれました。

七月二十日、陣地もほぼ完成し、弾薬等の搬入の終

わった頃、師団命令で、連隊のうち一個大隊を残置して、他の二個大隊はパラオ本島に引き揚げることになりました。兵器・弾薬は携行し、食糧等は残置して本島に移動したのです。

連隊は連隊旗を中心に一心同体であって、今さら別個に戦うは不本意であるとの申し立てを行ったのですが、命令とあれば致し方なしと、涙をのんで別離に耐えたのでした。後日、アンガウルは敵米軍の上陸を迎え、第一大隊長後藤少佐以下全員玉砕することとなりました。運命はここで生死が左右されず。神様の未知るところでしょう。本島への引き揚げも敵機が上空を飛行する中の渡航でした。速やかに隠密裡に薄氷を踏む撤退でしたが無事完了しました。

本島へ引き揚げ後、アイライ飛行場の守備に就きました。毎日、敵機の跳梁下、空爆、機銃掃射を受け、守備隊はただ上空を見上げるのみにて、手の施しようもない有様でした。敵上陸の時に備えて陣地の整備、補強に懸命に働きました。

食糧が少なく、小隊自活のため、連隊命令で農耕班

が編成、班長にされ、甘薯、南瓜等の栽培に力を入れた業績が認められ、大隊長より感状を受けました。南洋特産の蝸牛、とかげ、ネズミ等は蛋白資源として大切な食用となりました。こうして食糧難から兵の体力は日に日に弱まり、今日も一人、明日も一人と栄養失調で倒れる者が続きました。こうした中で、相互の「和」を力説し、団結を信条として、分隊も統率し続けたのでした。

日時の経つと共に、敵機の跳梁はますます激しくなり、日中は樹木の陰から一步も出られない状態となり、野草、甘薯の葉等で飢えをしのぐ日々でした。絶えず上空から敵機が監視し続けているので、畑に出るの作業も危なくて出来ないのです。現地自活もお手上げとなりました。

連隊主力がパラオ本島に引き揚げ、コロンバンガラに残留した第一大隊は、九月一日、米海兵隊の歩兵二個連隊、砲五〇門、戦車五〇両、兵力二万一〇〇〇人、我が守備隊の二〇倍の敵の上陸を受け、これに対し水際陣地を守備する第三中隊（島大尉）の猛烈な反

撃で敵を水際まで追い落とす善戦を敢行したのですが、衆寡敵せず全員玉砕、各隊は随所に強力な反撃を加えつつ、逐次復郭陣地へと後退、配備に就き、徹底した持久反撃で敵を破砕すること十月一日頃まで二週間に及んだのです。その善戦敢闘は天聰に達し「アングウル地区隊に対しおそれ多くも御嘉賞の御言葉を拝す」。

会津若松出身で島の村長二世のマサオ・エンドウ氏の回想として、「最後の攻撃に私たち島民も参加したと言ったら砲兵中隊長の松沢中尉から、皆さんは日本人でないのに今までよく協力してくれました。私たち軍人は祖国日本のため死なねばなりません、皆さんはその必要はありませんので、米軍の保護を受けてください。これは守備隊長後藤少佐の言明です」と語っています。

同じ連隊で、しかも私たちも同じこの島の配備に就いていたアングウル残留守備の第一大隊の将兵の玉砕と敢闘に郷土宇都宮の誇りと永く語られることであり、また将兵の英霊のご冥福を祈念申します。

十月一日、守備隊の最後の伝令として、水泳の達人・金城二等兵（沖繩出身）は、四〇キロの海域を力泳し、バラオ本島に守備隊玉砕の様子を報告するという偉業を達成しました。

終戦を迎え、復員は十月二十一日より開始され、最後に中隊長と私と鈴木君の三人だけが残留することになりました。復員する人は心から跳び上がって喜びました。私たち残留者は惨めでしたが、心を閉ざして復員者の手伝いをしたり、復員を見送ったりしました。皆が去った後のガランとした空き兵舎に復した時の空虚さは、さすがに耐えられない淋しさを感じたものでした。

残留者三人で第三歩兵砲中隊代表としてアラカベサン島飛行場に集合して残留隊を編成し、米軍の指示に従ってコロール島の清掃作業に従事しました。そして翌昭和二十一年二月十九日乗船、浦賀港に復員しました。

復員後結婚し、三男一女の父として農業を守り、出

征時の農業規模は一町五反歩でしたが、復員後、銳意  
擴張に努力し、現在四町五反歩になり、長男夫婦を助  
けて働いています。

昭和六十一年二月、日本青年遺骨収集団主宰のパラ  
オ諸島派遣団の一員に選抜され、かつての戦場に赴  
き、戦友の遺骨収集と慰霊に加わり、全く万感胸に迫  
る思いでした。